

# 「地域伝統文化を支える森づくり」

## －「御柱の森」における取り組み－

南信森林管理署 下諏訪森林官

○ 向井 明

御柱の森づくり協議会 会長

○ 宮坂源吉

### 要旨

「御柱祭」は、「日本三大奇祭」の一つとして知られています。

この祭に使用される諏訪大社下社の御柱用材は、下諏訪町の東俣国有林から切り出されています。

南信森林管理署では、御柱用材を将来にわたって供給していくために、国有林野内に「御柱の森」を設定し、地域とともに伝統文化を支える森づくりに取り組んでいます。

### はじめに

昨年、当署管内にある諏訪大社において、数えて7年目ごとに開催される「御柱祭」が執り行われました。

この祭は、約1,200年の歴史を持つ諏訪地方の伝統行事です。今回の祭では、県の内外から179万人に及ぶ観光客が諏訪の地を訪れました。

この御柱用材を将来にわたって確保していくために、「御柱の森」において地域の方々と、資源調査や森林整備に取り組んでいます。

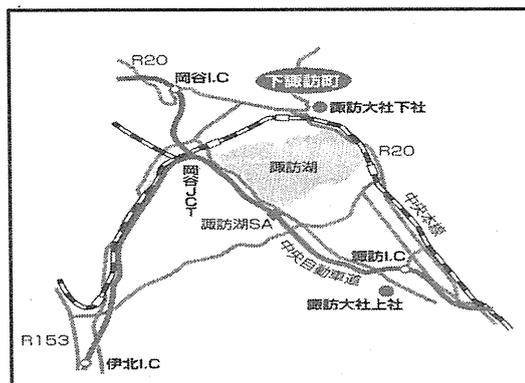
## 1 御柱祭の概要

### (1) 諏訪大社の概要

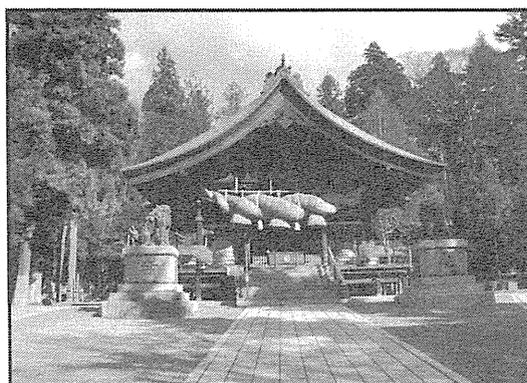
諏訪大社は、本宮、前宮から成る上社と、春宮、秋宮から成る下社を合わせて1社が形作られています。(図－1、写真－1参照)

神社創建は古く、1,500年前から2,000年前と言われ、日本最古の神社の一つに数えられています。

武将が信仰したほか、農耕の守り神、自然現象を司る神として庶民の間にも信仰が広がり、その分社は1万社を越え、分布は全国に及んでいます。



図－1 諏訪大社位置図



写真－1 諏訪大社秋宮

(2) 御柱祭りの概要

正式名称を「式年造宮御柱大祭<sup>みはしら</sup>」と言い、7年目ごとの寅と申の年に社殿を建て替え、その四隅に御柱を曳き立てる神事で、県の無形民俗文化財に指定されています。社殿の造営は、神社の内部的神事であることから、一般の人々が参加できる御柱の建立が有名となっています。

祭の歴史は古く、1,200年前の平安時代から行われるようになったと言われています。御柱用材は、上社では、八ヶ岳の御小屋山<sup>おこやさん</sup>の社有林等から、下社は霧ヶ峰に近い東俣国有林から切り出され、10tにも及ぶ大木を千人を超える老若男女が曳いてきます。

途中には、急坂を下る「木落とし」、清流を渡る「川越し」など多くの見どころがあり、見物人を魅了します。(写真-2、写真-3参照)

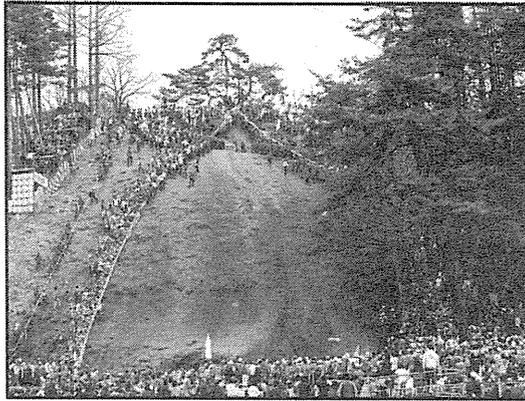


写真-2 木落坂

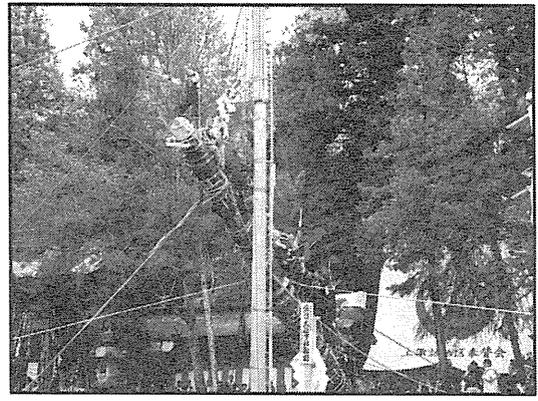


写真-3 建て御柱

2 御柱用材の確保

(1) 御柱用材

御柱用材は、過去にヒノキ、サワラ、スギ、カラマツ等も使用した時代があったと伝えられていますが、近年では、ウラジロモミが使用されています。

胸高直径1m近い大木が使用され、1回の御柱祭で、一つの宮に4本ずつ、合計16本(上社含む)が必要となります。(写真-4参照)

御柱には、腐りがなく通直な木が必要となり、最近5回の直径階別使用状況は、60cm台が6本、70cm台が11本、80cm台が13本、90cm以上が10本となっています。(表-1参照)

表-1 御柱用材使用実績(下社5回分)

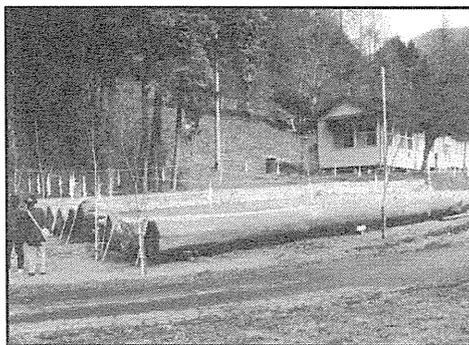


写真-4 たなこぼ 棚木場

	昭和55年		昭和61年		平成4年		平成10年		平成16年		平均	要 括			
	香 宮	秋 宮	香 宮	秋 宮	香 宮	秋 宮	香 宮	秋 宮	香 宮	秋 宮		60cm ~69cm	70cm ~79cm	80cm ~89cm	90cm 以上
1号	81	100	80	96	88	91	80	102	96	103	85 cm			1本	9本
1号II	83	86	82	88	83	85	74	72	88	80	83 cm	2本	7本	1本	
1号III	70	80	71	73	71	80	70	82	80	86	76 cm	5本	5本		
1号IV	84	89	87	70	87	77	64	68	70	78	68 cm	6本	4本		
計											6本	11本	13本	10本	

(2) 御柱用材を取りまく情勢

上社では、社有林から御柱を切り出していましたが、昭和34年の伊勢湾台風により、大きな被害を受けたことから、適材の確保が困難となり、前回(平成10年)の祭では、東俣国有林から御柱用材を供給しました。

祭には大径材が使用されることから、今後、いかに将来にわたって御柱用材を確保していくかが重要な課題となります。

このような情勢の中で、地域の皆さんの御柱用材確保に対する意識も高まりを見せ、平成8年には、将来にわたって御柱用材を確保することを目的とした、地域の任意団体「御柱用材を育む会」が設立されました。

(3) 御柱用材の現存量

平成8年から平成14年にかけて、「御柱用材を育む会」が、署と連携して胸高直径31cm以上のウラジロモミを毎木調査しました。

調査区域は、東俣国有林1137林班外で、後述する「御柱の森」の区域をほぼ網羅しています。

調査本数は、全部で1,629本あり、この内、現在又は将来において御柱として使用可能なものは990本、全体の約61%でした。

直径分布は、31cm～144cmの間にあり、31cm～70cmの直径階が多くなっています。(図-2参照)

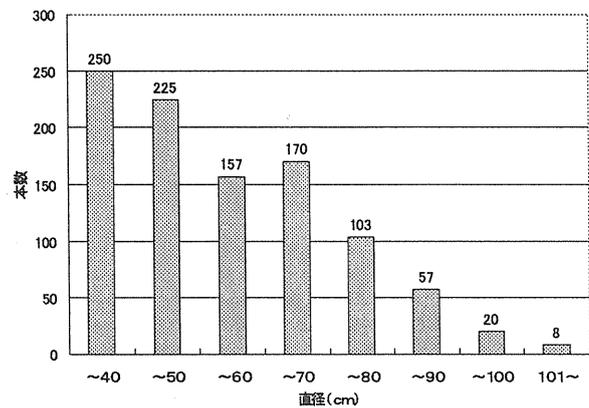


図-2 御柱用材直径階別分布

(4) 御柱用材の将来見通し

御柱用材の将来見通しについて、現在調査済みの990本の今後の推移を予測し、検討してみました。予測に当たっては、御柱祭5回分に相当する30年を単位として試算しました。

ア 御柱用材必要量

過去5回の御柱祭の実績を用いて試算しました。腐りなどの外見で判断できない欠点がある場合を想定して、危険率を1.1倍としました。

その結果、60cm台が7本、70cm台が12本、80cm台が14本、90cm以上が11本、合計44本必要となります。(表-2参照)

表-2 御柱用材必要量(下社5回分) (単位:本)

必要直径	使用実績 (春宮+秋宮)	危険率	必要本数
61cm～70cm	6	1.1	7
71cm～80cm	11	1.1	12
81cm～90cm	13	1.1	14
91cm以上	10	1.1	11
計	40		44

イ 直径成長の予測

樹齢と直径の関係をグラフにして予測しました。御柱として使用できる60cm以上に成長するには約120年、最も太い一の柱に使われる90cm以上まで成長するには約190年かかることがわかります。(図-3参照)

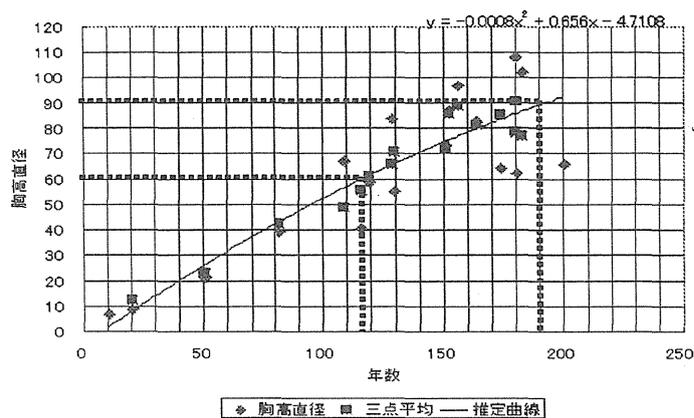


図-3 直径成長推定曲線

ウ 本数逓減の予測

年数の経過に伴う本数の逓減は、収穫予想表から本数逓減率推定曲線を作成して予測しました。30年経過すると本数がほぼ半減します。(図-4参照)

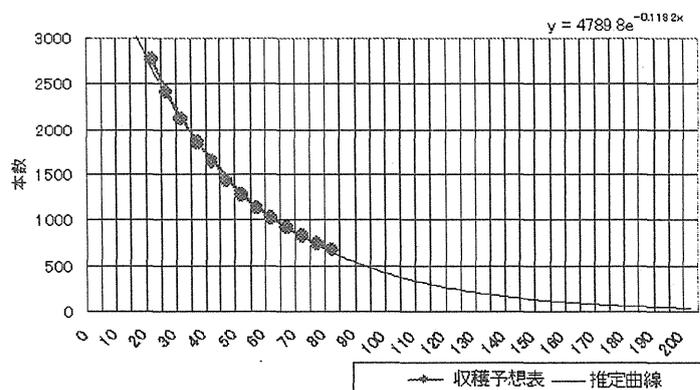


図-4 本数逓減率推定曲線

エ 将来見通し

御柱用材必要量、直径成長推定曲線及び本数逓減率推定曲線を使用して、将来の供給可能量を見通してみました。(表-3参照)

現時点では、用材不足の心配はないと思われます。

しかしながら、予期しない台風等の被害や搬出困難地にある用材等を勘察した場合は、更に前倒しになるおそれがあり、未調査の30cm未満のウラジロモミが将来に大きく影響することがわかります。

将来にわたり御柱用材を供給していくためには、長い年月がかかることから、今から十分な対策を講じていく必要があります。

表-3 御柱用材の将来見通し

(単位:本)

区分	本数	30年後	60年後	90年後	120年後	使用量(30年分)
~30cm						
31cm~40cm	250					
41cm~50cm	225	128				
51cm~60cm	157	111				
61cm~70cm	170	71	54			7
71cm~80cm	103	72	42	14		12
81cm~90cm	57	36	56	7	7	14
91cm~	28	31	29	31	11	11
計	990	443	181	52	4	44

(注)1 網掛けの欄は、現在調査していない直径30cm以下の御柱用材の影響を強く受ける範囲

2 計欄は、30年間に使用する御柱用材を差し引いた数値

### 3 「御柱の森」の設定

#### (1) 設定の背景と目的

1, 200年の伝統がある「御柱祭」を将来にわたって伝えていくためには、御柱用材の確保が重要な課題となります。

前回の御柱祭では、上社の御柱用材を東侯国有林から切り出したこともあり、地域の皆さんの御柱用材確保に対する関心は、非常に高いものがあります。

このため、南信森林管理署では、平成14年に「地域伝統文化を支える森づくり」として「御柱の森」を設定し、地域の皆さんと森林整備等に関する協定を締結しました。

#### (2) 「御柱の森」の概要(図-5参照)

- ・位置 諏訪郡下諏訪町  
東侯国有林  
1137林班外
- ・面積 383.46 ha  
(東侯国有林の23%)
- ・林況 人工林68%  
天然林32%



図-5 「御柱の森」区域図

#### (3) 協定締結(写真-5参照)

- ・締結年月日 平成14年11月26日
- ・相手方 「御柱の森」づくり協議会  
(御柱用材を育む会  
諏訪大社  
下諏訪観光協会  
下諏訪町木遣り保存会  
下諏訪町)
- ・森林整備等の内容 モミの植込み  
つる切等

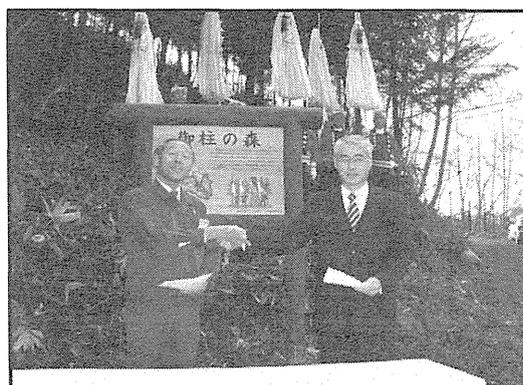


写真-5 協定締結時

#### (4) 活動状況

平成15年度には、50本の植込みとつる切を、延べ165人で実施し、平成16年度には、70本の植込みを延べ70人で実施しました。(表-4参照)

表-4 「御柱の森」における活動

年度	活動内容	参加人員
平成15年	ウラジロモミの植込み及びシカ防護網設置 (50本)	165人
	つる切	
平成16年	ウラジロモミの植込み及びシカ防護網設置 (70本)	70人

平成16年度に実施した植込みは、「22世紀の御柱を育てる植樹祭」として実施したところ、御柱祭の年でもあったことから、多くのマスコミが取材に訪れ、大きなPR効果を上げることが出来ました。

また、これらの取り組みは、「御柱の森」を訪れるイベント「御柱の森ウォーク」の開催といった、地域の新たな取り組みに繋がっています。

(写真-6参照)



写真-6 新聞、御柱ウォークパンフレット

#### 4 現状の課題と今後の取り組み

御柱用材を将来にわたり供給していくためには、継続的にウラジロモミの幼齢木を育成していかなければなりません。

そこで、1回の祭に直径90cm以上のウラジロモミを3本供給することを条件に、各径級階ごとの期待する本数を試算しました。(表-5参照)

表-5 径級階別期待本数

径級区分	年数範囲 (A)~(B)	期間 (H)	期間内御柱回数 (G)	世代の負担補正 (6年間分) (C)	本数減減率 (D)	本数 (単年度) (I)	本数 (6年分) (J)	使用可能率 (E)	供給可能量 (J)*(E)	御柱使用量 (1回) (F)	期間内御柱使用量 (F)*(G)*(C)	期待本数 (優良木のみ)
												(H)*(I)*(E)
(初期本数)						85	510					
11cm~20cm	24 ~ 39	15			0.82	70	419					636
21cm~30cm	40 ~ 56	16			0.62	43	260					421
31cm~40cm	57 ~ 75	18			0.61	27	159					291
41cm~50cm	76 ~ 94	18			0.61	16	97					177
51cm~60cm	95 ~ 114	19			0.60	10	59					113
61cm~70cm	115 ~ 136	21	4	0.27	0.60	6	35		21	1	1	75
71cm~80cm	137 ~ 160	23	4	0.25	0.60	4	21	0.61	12	3	3	49
81cm~90cm	161 ~ 187	26	4	0.23	0.60	2	13		6	3	3	33
91cm~100cm	188 ~				0.59	1	7		3	3	3	3

本数低減率など、一定の仮定の下での試算ですが、40cm以下の径級において、実際の本数が期待本数を下回っています。また、危険率等を考えると60cm以下の実本数が少ないと考えられます。(図-6参照)

将来にわたって用材を供給していくためには、「御柱の森」の協定に基づき、必要な植込みや適時適切な保育等を行い、60cm以下のウラジロモミを確実に育成していくことが必要と言えます。

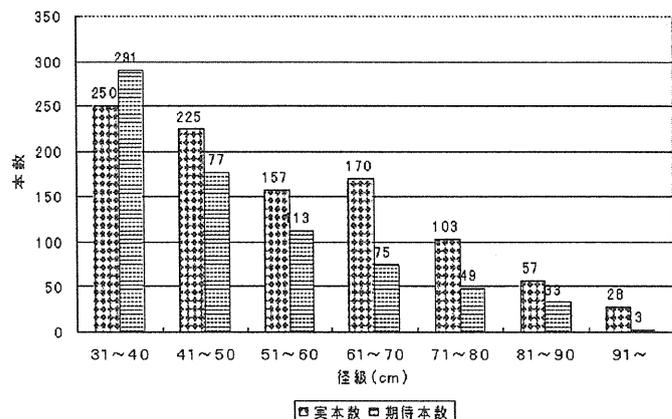


図-6 径級別階期待本数

表－６は、南信森林管理署における、「御柱の森」の森林施業の考え方です。

除間伐や主伐時には、ウラジロモミを積極的に保残するとともに、つる切や必要な照度を確保するための施業を行っていくこととしています。

表－６ 「御柱の森」森林施業

人工林	更新	更新(主伐)時に、モミの保残に努める(必要に応じて、モミの植込み等も一部検討)。
	保育	造林木の下刈、除伐時等にモミの稚幼樹がある場合は、積極的に保残を図る。
		必要に応じ、造林木と併せてつる切を行う。
間伐	モミに対する照度の確保を念頭に選木を行う。	
天然林	更新	御柱の伐採跡地については、周辺の灌木を伐採し、照度を確保した上で植込みする。
	保育	必要に応じて下刈、除伐、つる切を行う。

また、この地域は、近年、ニホンジカによる食害が問題になっており、食害を防止する対策も必要となってきています。金網等の設置には限界があることから、頭数調整などの対策も必要だと考えています。

おわりに

下社の御柱用材は、歴史的慣習により東侯国有林から供給してきました。このため、森林施業に当たっては、これまでも御柱の供給について配慮してきました。

昨年の祭で秋宮一の柱に使用された180年生のウラジロモミは、90年生のヒノキ人工林の中に立っていました。90年前に、先人が100年後の祭りのために残したものです。

御柱用材の育成には、150～200年を要することから今後も、国有林の果たす役割は大きいものと考えています。

「御柱の森」の活動を通して、森林管理署と地域の方々が協力し、将来にわたって伝統文化を支えていくとともに、御柱の森に係る地域の新たな取り組みにつなげていきたいと考えています。